Acanthus

（土浦一高・旧土浦中学とその周辺の物語）

第204号　2026（令和8）年10月13日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会
ＨＰhttp://www.sin-syu.jp/

進修同窓会 HP にアクセス

全日制では初めての女子生徒を迎える
（1950［昭和25］年、高５回）

土浦一高生徒会

1949［昭和24］年９月、生徒会が正式にスタートし、1950年春には、新制高校初の入試が行われ、新制中学から６名の女子を含む新入生を迎えました。

今号では、土浦一高生徒会の歩みを辿っていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。

なお、引用文中の【　　】は筆者による注記です。

1950［昭和25］年４月、新制中学から新入生(高5回)が入学。４年間、最下級生の地位に甘んじてきた2年生(旧制中学最後の入学生。高４回)は、待ちに待った後輩を迎えました。彼らは、旧制中学以来の伝統を示そう、と手ぐすね引いて待ち構えていましたが、豹変した(少なくとも２・３年生にはそう見えた)先生方に抑えられ、１年生からは、民主主義教育の事理を振りかざされ、地団駄を踏む思いでした。

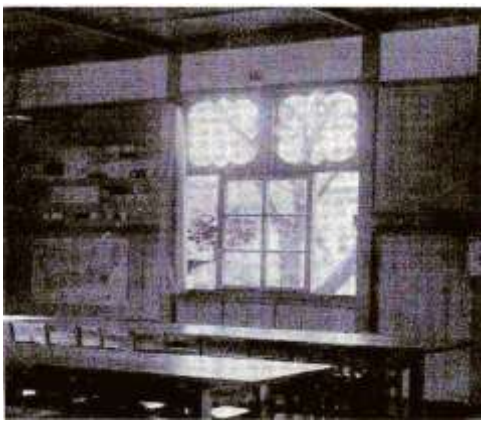
５月初旬、「生徒会会則」の新案が成り立ち、図書・風紀・出版・集会・衛生・会計の６つの小委員会が設置され、応援団も結成されました。５月23日には、集会委員会が衛生委員会とともに、学校行事として復活した「全校筑波登山」の企画・運営に当たりました。

５月25日には、生徒控室を図書室に改装する工事が完了し、新書庫へ旧蔵書を統合移管して、整理が始まりました。この時の図書委員の奮闘ぶりを、図書館長であった石崎正雄先生(国語　在職　教諭1936［昭和11］年～1965［昭和40］年　教頭1965年～1968年)は、『進修　復刊第３号』「本校図書館をめぐつて」の中で次のように記しています。

「……。閲覧室の床張り等工事も残り、整理も終らなかつたが未完成のまゝに七月三日記念すべき開館の第一日を迎えた。七月十九日より休暇に入つたのであるが、一方さきに残された工事を進めると共に、閲覧貸出を一切停止して十四人の図書委員の参加を得て本格的な整理の仕事に取組んだ。

図書を日本十進分類法によつて分類し、図書原簿をつくり、一冊〳〵について事務用カード、閲覧用カードをとり、ラベルブックカードを装備して完全な開館に支障のないように整理し終つたのは八月二十一日であつた。

五月二十五日整理開始以来延六〇七人、日数にして一〇五日を要した。この間、図書委員諸君は殆ど毎日六時過ぎまで、殊に夏休中は暑熱の汗をしたゝらせながら献身的な貴い努力を重ねた。……。」



1950［昭和25］年に生徒控室を改装した図書室

3日間に亙る、文化祭(10月19・20日)・体育祭(21日)の開催については、生徒会長齊藤和夫(高３回)が、『進修復刊第３号』「生徒会を省みて」の中で、その苦労を述べています。

「……、一学期の行事である文化祭、体育祭をむかえた。即ち文化、体育両準備委員会が生徒会評議会、体育部、文化部一体となつて結成され、いよいよ深刻化した予算面に対しては実に悩んだが、……、殊にプログラム作成等については全くない予算の中よりの為全く粉骨砕身と言う言葉が適当する位であつたが各委員の努力と全校生徒の協力と支持、及び諸先生方の一方ならぬ後見により内外の人々の好評を博し得て終つた事は、自主・協同・責任を校訓とする本校生徒の自治意識の現われであると思う。……。」

部活動

部活動では、以下の文化部12部、運動部11部（10月以降は12部）が活動していました。

○文化部

弁論部・文芸部・演劇部・美術部・生物部(前科学第一部)・科学第二部・映画部・歴史部(前人文科学第一部・元郷土研究部)・人文科学第二部(地理部)・書道部・特別研究部・写真部

○運動部

水泳部・野球部・庭球部・バレーボール部・卓球部・送球(ハンドボール)部・(陸上)競技部・マラソン(駅伝)部・籠球(バスケットボール)部・ラグビー部・軟式野球部・柔道部(10月以降)

10月には柔道部が復活しました。文部省の働き掛けに対して、1950年10月13日、GHQが、事務次官名で「学校における柔道の実施について」との通牒(通知)を発して、柔道の禁止を解き、正式に学校柔道を許可したため、本校でも柔道部の活動が可能になったのです(弓道は1951年7月に、剣道は1953年7月にそれぞれ解禁となった)。

各部においては、活動資金の不足が悩みの種でした。新制高校が定着し、戦後の落ち着きを見せ始めた社会の中で、生徒たちのクラブ活動への関心と熱意は高まる一方でしたが、資金難は深刻な問題であったと言います。高３回岩﨑孝志は、この点について次のように記しています。

「学友会と呼ばれていたいわゆる部活動は、予算をめぐるトラブルが多かった。予算の原案は最初は学校側が作成していたが、新自治会が発足してからは、生

徒会の会計委員会の役割となり、文化部系統が多かった会計委員と運動部との間で、予算額をめぐって、毎年ひと騒動あった。もともと予算総額が少ないうえ、野球部をはじめ運動部に予算の大半がいっていたことに、文化部系が反発したことにも原因はあったようだ。

体育祭はともかく、文化部が主体の文化祭は、まず資金集めから始まった。文化祭用の予算などもともとなかったため、市内の映画館・書店といったところから寄付を貰いに歩いた。体育祭さえも自治会の行事と考えられ、飾り付けその他の費用を生徒が工面しなければならなかった。旧制中学から新制高校にそのまま移行したため高校一年でも在学四年目であったから、一・二年生のときでも結構大きな顔をしていて、自由にふるまっていたように思う。」(1997[平成9]年刊『進修百年』「旧制中学から新制高校へ」)

応援団、第一・第二応援歌の誕生

応援団の結成、応援歌の誕生について、『進修同窓会々報第18号』(1976[昭和51]年刊行)は、「応援歌誕生うらばなし」として、次のように伝えています。

「昭和24年に応援団が結成され、団長に高校3回生の生徒会長で、弁論部の広瀬英雄氏が推された。対校試合の都度、相手方の学校は校歌と共に応援歌を歌い、試合を盛り上げるが、本校では校歌しかないので、予科練の歌を併せて歌ったりした。そこで応援歌の必要性を痛感し、初めは、校訓も変わったのだから校歌を作り替えて、もっと意気が上がるものにしようという考えもあったが、長南教頭【俊雄　国語　在職　教諭1939[昭和14]年～1949年、教頭1949年～1953年、校長1964[昭和39]年～1965年】の『伝統的に歌い継がれてきた校歌を作り替えることはたやすい事ではない。それなら応援歌を作るべきだ。』との意見でその方向へ進み、各学年、各教室に応援歌募集要項を貼り出し、応募25篇の中から、先生を交えた選考委員により、文芸部長であった根本基之氏【高3回】の作品が選ばれた。作曲は細田義勝氏に依頼。

氏は、戦前の『忘れちゃいやよ』の流行歌を作曲して名を成し、土浦の『霞浦(かほ)おどり』の作曲者でもあり、当時真鍋町に疎開していた。

昭和25年秋【1950年10月30日】、発表会は講堂で盛大に行われ、全校生徒に披露された。この応援歌誕生を彩った人達は、みな高校3回生であった。」

「第二応援歌(校旗の下に)」は、最初の東京オリンピックが開かれた1964年に募集され、当時軟式野球部マネージャーをしていた伊藤典子(高17回)の作が選ばれ、ブラスバンド部の山田和生(高17回)が曲をつけました。伊藤は、その思い出を次のように記しています。

「……。当時私は、二年先輩の野村ルナさんに勧められて、軟式野球部のマネージャーをしておりました。部員が第二応援歌募集の話を聞きつけ、誰かが応募して、自分たちで作った応援歌で試合をしたら、いい記念になるということになり、応募しました。

作曲は、当時ブラスバンド部で活躍されていた、同学年の山田和生さんが担当されました。山田さんは、燃えあがるような熱気と、一丸となってつき進むチームメイトの和を表現されたと思います。出来上がった時の感想は、明るく生き生きとした、スポーツをする人も応援する人も一つになれる、気持ちあふれるいい曲だ、これを歌って応援した日のことをきっと思い出すだろうというものでした。……。」(『進修百年』「第二応援歌の頃」)

学年襟章の制定　1959[昭和34]年

現在も使われている学年襟章は、1959年に制定されました。その制作経緯を高13回根本和明先生(理科　在職1989[平成元]年～1990年)は、1997年刊行『進修百年』「一高の思い出」の中で、次のように記しています。

「二年生の秋に学年章を作ることになりました。各学年クラスから制作委員が選出され、会合をもちました。同級の土金雅晴君と私が特に力を入れ、真っ暗になった教室に二人だけ残って、いろいろ考えたこともありました。学年色は紺と緑と赤に決まりました。一番人気の紺色は先輩にさっさと持っていかれました。一年生に赤を押し付けて私達は緑をとりました。ちなみに、平成七年は昭和三十四年から三十六年経っているので、学年章を決めた年と同じ色割りで、三学年が紺、二学年が緑、一学年が赤です。色は決まりましたが、そこに入れる文字が問題でした。ＴＨＳとかＴＦＨＳも出ましたが、『漢字で土浦一高と入れた方がアカ抜けしている』という意見が通って、今の形になりました。年が明けて昭和三十五年一月に試作品が届きました。それは、平行四辺形のフチの部分が銅メッキでしたので、注文どおりの銀メッキにしてくれるよう頼みました。記章の原型を彫ったのは、瀧田先生【勝　英語科　在職1953[昭和27]年～1963[昭和38]年】の知り合いの方だと、英語の授業で伺いました。長い間使うことになる学年章の制作を生徒の手に任せてくださる一高の先生方の度量に感謝すると共に、その制作に参加できたことを幸せに思っています。校歌にも応援歌にも生徒の参加があります。生徒の自主性を尊重し、先生方は大きな力でそれを見守り助言するという、生徒主体の校風は、百年前からあったのです。」

第一應援歌(亀城健児)

一
霞ヶ浦に　陽は映えて
希望は躍る　この朝
見よ溌溂と　青春の
闘志に燃えて　こぞり立つ
亀城健児の　血はたぎる
おお競え　土浦一高第一高

二
流れ豊かな　桜川
映して清き　旗の下
見よ風を切り　地を蹴って
あいうち競う　晴れの技
亀城健児の　気は上がる
おお競え　土浦一高第一高

三
紫けむる　筑波嶺を
背に負う我等　力あり
見よ眉あげて　堂々と
王座を目指し　勝ち進む
亀城健児の　名は薫る
おお競え　土浦一高第一高

第二應援歌(校旗の下に)

一
大空高く　湧き上がる
この大歓声の　示すもと
見よ土浦一高の　校旗の下に
胸は高鳴る　腕は鳴る
いざゆけ一高　無敵の一高

二
勝運常に　我にあり
この輝く胸に　ふり仰ぐ
見よ土浦一高の　校旗の下に
晴れの王座を　得てここに
勝ち鬨上げん　無敵の一高

(高21回　松井泰寿)